

す 住んでいるまちの力になる

私が現役を引退してから早いもので、もう七年以上がたつ。現役引退を宣言してからもしつかりまちづくりの現場に関わっている人も多いと思うが、私は意識して自分は現場に出ないようにし、現場は後継のスタッフに信頼を持って託してきた。何度も書いているが、まちづくりには決まった道筋があるわけではなく、そのまち、その地域の現状や課題はそれぞれに違うので、ひとつひとつ丁寧に向きあい、何をしなければならぬかを考えなければいけない。それを自分で考え、結果に責任を持つようにならないければ一人前にはなつていけないと考えている。ズーッとボスの下で仕事をしているとそういう自覚が生まれてこない可能性がある。そう思つて引退を決めたのだ。

その後は、ノウハウを伝える研修や委員会など数件を継続しているが、そのほかの時間は長年親しんだまちなかを離れ、隠居暮らしを楽しんでいる。戦後、樺太などから引き上げてこられて苦労して農家となられた方が多く暮らす土地で、起伏に富んだ地形に森と畑が点在する素敵な環境だったのも、隠居暮らしを豊かにしてくれていた。

そんな土地で木々や草花に囲まれ、小動物と出会う日々を楽しんでいたから、突然、近くの森林の樹木を伐採してバイオマス発電所をつくる計画が浮上した。地域への計画内容の説明はされていなかったが、ホームページなどをつうじて計画が大規模なものであることがわかってきた。知り合つて間もない町内会長や副会長と相談し、周辺町内会も含めて反対の取組をすることになった。そうなる私の出番となる。計画が地域に与える影響評価から周辺町内会への説明資料の作成、自治体との協議など必要な取組を進め、結果的には事業者予定者に計画の撤回を約束させることができた。

現役引退をして、仕事としてのまちづくりから身を引いたが、自分が「住んでいるこのまちの力になる」という道があることに、今更ながら気が付いた。このまちづくりへの関わりの仕方は、クライアントへの気遣いもなく、成果が自分の暮らしに直結するし、生きてここに暮らす限り結果を見届けることもできる。変化に対しても柔軟に対応できるといふ良さがある。そしてなにより地域の皆さんの笑顔が、ご褒美になる。